

陸自駐屯地紹介シリーズ 第45回

北辺を守り抜く 美幌駐屯地

第6普通科連隊 他

駐屯地シリーズ編纂委員会

はじめに

畏友が仙台にいる。東北方面管制官

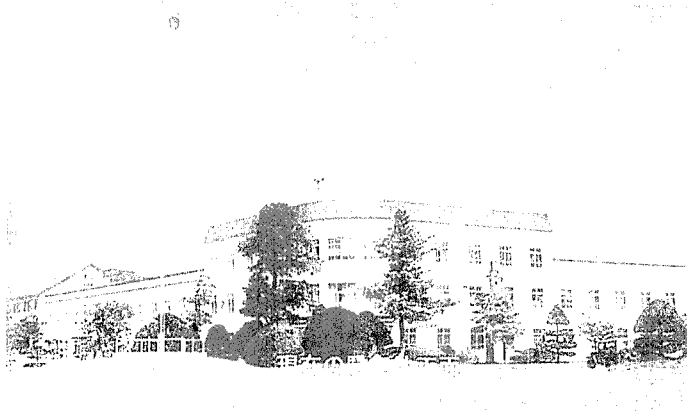
往路随想

された。

象隊本部で机を並べていた偕行社会員の末永孝耶氏陸自71であるが、退官後、宮城県護国神社奉仕会の中心として広い神域の清掃奉仕に活動し、歩兵第4聯隊の激戦地ガダルカナル島へ2回の慰霊行脚などを続けている(本誌2月号に投稿掲載)。手紙を送ってきた。「美幌を取り上げてほしい」。若い頃勤務した懐かしい部隊だという。リクエスは嬉しい。が、時に夏の盛り、美幌は最も凄じやすい頃の筈。警察予備隊以来ここで多くの方々が酷寒に耐えた日々を思いを致して文章を書くなら厳しい真冬でなければ意味がない。そう考えた。冬になって駐屯地に取材をお願いすると、2月18、19、20日頃に連隊のスキー競技会があるという。素晴らしい。この日を取材日にして取材申し込みFAXの後、広報班長に挨拶の電話を差し上げると、恐縮するばかりの丁寧な応答と取材スケジュールが示された。

東京羽田空港から女満別空港まで約105分の飛行、空港から美幌まで87kmであり、北の果てながらそれほど苦痛とする所要時間ではない。飛行中雲に閉ざされている間、警察予備隊創立直後の旅程を想像してみた。宮城県内で応募した入隊者は現在の船岡駐屯地に出頭し2昼夜かけて移動したのだと末永氏の手紙に記されていた。車内冷房など思いも寄らぬ頃のこと、薄暗い車内照明の下の男たちが心の内に抱えた「国軍再興」の思い、先の大戦で散華した戦友たちの「祖国よ 悠久なれ」の想いを胸に焼き付けて馳せ参じる眼光の鋭い戦争体験者たちの姿があった。また2年間の満期を終えた時に支給される金額を学資や事業資金にしたという人々の眼も思い浮んだ。交々の事情を秘めた応募者を美幌駅頭で迎えたのは白い割烹着に身を包んだ婦人のお茶のサービスであったと記録され

ている。応募者の安堵した深い吐息さえ聞こえてくるのではないか。戦後のその頃でさえ美幌には警察予備隊を暖かく遇する風土があったという。やがてゲートで出迎えて頂いている美幌駐屯地渉外広報班長の笑顔に接したのである。



美幌町点描

空港ビルを出る前から眼に焼き付いたのは、一面の銀世界であった。寒い人家の疎らな、なだらかな起伏を覆い、その中を除雪された道が交叉し

ている。ここはオホーツク海から30km内陸に位置し天候もよく農業を基幹としている。主な産物はビート、馬鈴薯、小麦、町には甜菜糖工場が蒸気を吐いている。人口は約2万人、近隣に風光明媚な観光地があり、その代表が映画「君の名は」で有名になった美幌峠で、すぐ近くに屈斜路湖、やや遠いがオホーツク流水海岸、網走監獄跡がある。

雪原の中を25分ほど走り駐屯地の営門に着く。左手に植え込みと2棟続いた建物、2棟目の本部庁舎の2階には艦橋を思わせるベランダがあり、その内側が駐屯地司令室である。

ここは戦前美幌海軍航空隊基地で、その跡地を警察予備隊美幌部隊は駐屯地としたのである。日本は貧しかった。警察予備隊配置前に十分整備が施されたとは考え難い。寒風が吹き込む隊舎への人居だったのではなからうか。その頃の建物が残っている。本部庁舎、雪中廊下である。特に雪中廊下は今も酷寒荒天時の基本教練、体力錬成、格闘訓練の場所として多用され、他駐屯地から転地訓練使用の申し込みにも提供しているとのこと。先輩方が懐かしく思われる記念碑であろう。

想いは転じて隊員の部隊勤務の夜など、狭い借家にひっそりと肩を寄せ合っていたご家族の姿を想像するのである。今のように流通経済が確立して

いないころ、越冬野菜や、暖房燃料の確保にも苦労されていた筈で、草創期は家族共々の窮乏を重ねた日々があったのではあるまいか。取材の最初にまず昔日の先輩方の「苦労の姿を偲んだ。

### 駐屯地司令表敬

本部隊舎に近づくと玄関前に人物が見えた。「駐屯地司令です」。渉外広報班長の声に慌てて安全ベルトを外し下車準備、降り立って駈け寄り丁寧に挨拶した。第6普通科連隊長兼ねて美幌駐屯地司令竹下秀毅1佐陸自79である。筆者とは卒業年次15年の開きがあるが一市井人となった今、司令のお出迎えに心から恐縮したことであった。渉外広報室に荷物を置き、階段を上り司令室の前に進んだ。ここでも室外に司令が迎えに出ておられた。

司令にインタビュするに当たって考えていたことがあった。警察予備隊発足以来隊員一同と歴代司令が北方防備に脳漿を絞り続けた日々の歴史の重さについてである。

大東亜戦争終了後ソ連は樺太と北千島に武力侵略した。北海道に野心を持ち、留萌―釧路線以北の領有を要求して米国に峻拒されたことが知られている。その野望は朝鮮戦争で韓国軍及び在韓米軍が南に追いつめられた時に膨らみきっていたかも知れなかった。朝鮮半島で北朝鮮がソ連の走狗となつて

猛進し、それに合わせてソ連が日本を侵略する恐れがあったかと考える。マッカーサーの仁川上陸に一度北朝鮮を鴨緑江付近まで追いつめた後、突如中共軍が怒濤の如く参戦し海戦術で連合国軍を南に圧迫した。この時もまた、道内は警戒を要する情勢にあったと考えるべきであろう。

その後も北辺駐屯地の役割の重さは変わる事がなかった。美幌部隊は遠軽部隊とともにオホーツク沿岸からの侵入を阻止する役目があることは誰の目にも明らかで、一旦ことあるときは「たとえ如何なる厳しい圧迫を受けよ



うとも、断固として最後まで守り抜く」。陸上自衛隊の人事担当者はその期待に応え得ると見込んだ指揮官を任命し、優先的に優れた装備と人員を配置してきたのである。事情は今も変わらない筈、その様子が触れたかった。

がして尋ねてみた。美幌には普通科連隊のみならず特科部隊も駐屯している。有事に迅速に協同チームを組んで近接戦闘力と火力を迅速に発揚する態勢であることは明白で、そのための日頃からの「仲良く」「楽しく」なのだろう。

### 連隊長統率方針・要望事項

連隊長の統率方針として「心身共に足腰の強い連隊を育成する」要望事項として「常に有事を意識せよ」「体力・気力・戦技の充実」を掲げている。「足腰の強い部隊」とは「具体的に何か」との質問に答えは「それぞれの部下を鍛えること」だけであった。詳しい説明よりもその一言の方が奥深い考えに近づけたような気がした。隸下中隊長を鍛えるということは指揮能力を鍛えることで、単に当面の体力や事務処理能力だけを期待することではない。青年幹部には現在の活躍ばかりでなく陸上自衛隊の将来を担う成長を、陸曹以下の隊員は美幌連隊の精鋭の歴史を担い続け得ることを期待しているのである。方針に込めた祈りを感じた。

### 駐屯地司令要望事項

美幌駐屯地司令として「仲良く 楽しく」「地域と共に」の二つを掲げている。二つとも骨を銜ったものではない。二つともありそうな言葉である。だがその背景に意味があるような感じ

また最近「地域とともに」の意味は拡大されつつある。従来はこの意味は、防衛行動に理解が欲しいための部隊側からの地域協力・広報活動の働きかけや災害派遣が内容であったような気がする。だが今、地域側からの経済的・財政的貢献への期待が含まれるようになってきている。現に地方公共団体首長、市議会議員の駐屯地への陳情が増加している。部隊勢力の削減は地域にとって住民税収入の減少、地域消費減退、更に防衛予算の「周辺対策費」の減少に繋がり、現状では由々しい事態を引き起こすのである。

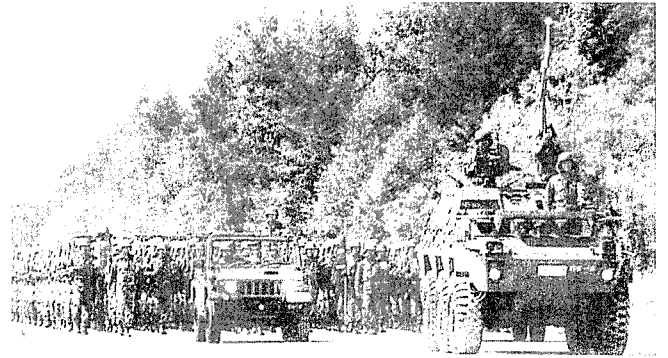
このような情勢の変化に対応する基本姿勢は、これら地域の要請を固く国防に直接関係はないと等閑視するのではなく、地域側要請を防衛態勢整備に直結するものとして積極的に対応するべきであろう。

美幌地方は、厳しい国民感情が大勢を占めた警察予備隊初期から暖かい理解を部隊と隊員に寄せ続けてきた。その証左たる当時美幌町長大庭康二氏が

寄せた一文を引用したい。「頭初略美幌駐屯地は半世紀に及ぶ歴史の中で……略……様々な人と人との交流があり、……輝かしい存在となっております。……今般『地域と歩む美幌駐屯地』と題し開基百年を記念して美幌叢書の第16号として発刊することとなりました。……21世紀になっても深い関係が維持されて行くことがわかれるのであります。以下略」。この一文が掲載されているのは、自衛隊が発行したものである。開基百年を記念して市民の為に発刊された美幌叢書である。これほどまでの支援があったのに冷たい態度に転じるのは許されることではあるまい。なにより日本人の美意識に反する。また新しい国民保護法の目指す国民の生命を守った上での防衛作戦の遂行には更に地域の協力が必要であることは論をまたない。筆者は駐屯地司令の和やかな表情にこの辺の心を読み取ったのであるが、見当はずれではないと自負しているところである。

**駐屯部隊 これまでの変遷**

美幌駐屯地に所在した部隊には変遷があった。かつて駐屯地に勤務したOBには「自分の部隊が消えた」と限らない寂しさを感じる事があるらしい。追憶に生きる先輩方のために、取って行数を割いてみたい。



- 昭和26年 4月  
警察予備隊美幌部隊開設
- 第62連隊第3大隊
- 第2施設大隊
- 第2偵察中隊が移駐
- 昭和27年  
第6連隊 高田から一部来駐
- 昭和29年 (当時の在隊部隊)  
第6普通科連隊に改称
- 第5特科連隊第3大隊に改称
- 昭和33年  
第306地区施設隊 帯広から来駐
- 昭和37年

- 第105特科大隊 東千歳から来駐
- 昭和44年  
第105特科大隊 北千歳へ移駐
- 昭和44年  
第101特科大隊 滝川から来駐
- 昭和63年  
第306地区施設隊 廃止
- 平成16年  
第5師団が第5旅団へ改編に伴い  
第5特科連隊第3大隊 廃止
- 第6普通科連隊重迫中隊 縮小  
(本部管理中隊隷下小隊へ)
- 現在の駐屯部隊  
第6普通科連隊

帯広に司令部を有する第5旅団隷下の主要部隊であり、隊員充足率、最新装備品補給等に重視されてきた部隊である。連隊長は前記の竹下1佐である。まずその颯爽たる観閲行進の姿を写真で見たい。連隊は第4中隊が装甲車化されており衝撃力のある普通科中隊として威容を誇っている。この連隊は前掲の通り昭和27年1月18日、新潟県高田で編成された一部が先ず美幌に移駐し、間を置かず主力も編成を待つて移駐した。その後改編を経て演習訓練を重ね、幾多の災害派遣、地域協力を実施して現在に至っている。特に積雪地部隊としての精鋭ぶりが知られており、今回取材の日も連隊スキー記録会が実施されていた。今後の



連隊対抗選手を育成することを狙いとしたもので、戦闘服にライナー(中褌)、自衛隊用歩くスキー、小銃、弾帯水筒と最も軽い競技服装であった。距離は約6km、上り下りのコースで、1組15名、16組のレースが行われた。ゴールに入って来る隊員の背中は汗でびっしょり、倒れ込む者や酸欠状態で大きな咳に苦しむ姿があった。中で先日卒業したばかりの幹部候補生、中でも女性幹部候補生が奮闘していた姿は印象的であった。ゴール地点で疲れ切った隊員をねぎらう連隊長の姿があった。

第101特科大隊

隊長 酒井史良<sup>ふくよし</sup> 2佐陸自86。千歳において播種(なま)の期を過ぎた第1特科群隷下の第101特科大隊は昭和37年に分駐し、さらに昭和44年に美幌に移駐した。上級部隊は第1特科団。昭和60年全国の重砲部隊に先立ち203自走りゅう弾砲が装備されている。

この装備で全力を尽くして訓練する



に幾つかの障害がある。まずその機動力を出し切れる道路が少ない。装軌車で舗装された一般道路を部隊行進するのは道路保守の点から懸念があり、近

間での演習となる。次にはその射程距離で、最大射程30kmを駆使出来る射撃場は日本の何処にもない。勢い、射距離を縮めた射撃になることと思うが、射撃散布や射撃修正に問題がないのか素人の懸念するところである。

大隊は有事の際には方面隊直轄の火力部隊として迅速に要所に展開して敵を火制するものと考えられる。取材当日は演習が迫っているためか、多くの砲が白い布で擬装途中であった。

第2普通科直接支援小隊

隊長 戸塚広次<sup>ひろし</sup> 2尉陸自03。この部隊は、帯広に本部がある第5後方支援隊の隷下で、正式には第5後方支援隊第2整備中隊第2整備小隊という長い名前である。第6普通科連隊が駐屯する美幌に駐屯し日常および野営訓練に同行し整備品の整備、部品の補給に任じる部隊である。

駐屯地の一角に車両整備工場を持っているので見学した。筆者の頃のものとは比べものにならない新しきで、高い天井と厚手の扉で区切られた場内には所狭しと整備ピストや天井クレーン、部品・工具などの整理棚が並び、仕掛け中の整備車両が人庫していた。

中に一人の整備員が黙々と場内を点検している。工場責任者阪井一曹である。口調は当初は訥々としていたが、整備支援について自信のほどを尋ねた

途端、下り坂でサイドブレーキを放した車のように滑り出した。連隊の整備対象車種はジープ2種、大型5種、中型2種、トレーラー、オートバイ、ノーマービル、雪上車等約15種類、30両に及ぶとのことである。整備業務は第2段階、第3段階の整備を行うが、この要員10名全員が、どの車種についても整備担当が可能な幅広い技術を保有している。工場長が着意している

ことの中に、「誰でも工場長が務まることを目指して技術の錬磨に邁進している。任せて欲しい」と胸を張っていた。後日、借行社で取材の様子を筆者の防大時代の指導教官に報告した時、「陸上自衛隊が精鋭であるのは、多くのこのような陸曹諸官が支えているからだ」。姿勢を正すようにして発言された。

第101特科直接支援大隊第1直接支援中隊第1直接支援小隊

この部隊の指揮官は山田浩靖<sup>ひろし</sup> 3尉陸自04で、北方面隊隷下の師団・旅団を除く方面直轄部隊の後方支援を行う北方面隊後方支援連隊の隷下部隊であり、連隊本部は恵庭市島松駐屯地にある。特科部隊の砲、車両、通信機、射撃統制装置の整備、部品補給などを任務とする部隊である。同じようにベテランの整備陸曹を擁し、特科大隊の戦

力発揮に貢献している事が伺われた。

美幌駐屯地業務隊

業務隊長は谷崎敏弘<sup>みひろ</sup> 2佐陸自70である。美幌駐屯地を代表として部外機関との折衝窓口、駐屯地施設の維持管理、衣類、食料などの補給、駐屯地隊員に対する厚生支援、医療支援等を行う北方面隊隷下の部隊であり、寒冷の駐屯地を維持管理するために奮闘している部隊である。

駐屯地渉外広報班

第6普通科連隊第1科長の指揮をうける。近年特に重要性を増した駐屯地広報・渉外を任務としている。部外に對する広報活動の活躍ぶりは、協力団体とその会員数の多さが如実に語っている。列挙したい。

- 美幌地方自衛隊協力会 2市8町村 599名 会長は歴代美幌町長
- 美幌駐屯地部隊充実整備期成会
- 全国自衛隊父兄会美幌地区協議会
- 隊友会北網地区支部協議会
- 防衛推進協議会
- 自衛隊女性協力会
- 自衛隊友の会

取材を終えてホテルに送って貰い、ロビーで補足の取材をしていた時である。婦人グループのやや時期遅れの新年会があり、中の一人が渉外広報班長に声をかけてきた。如何にも長い付き合いらしく活発に声を交わっていた。「お世話になってる方なんです」。女

子

性協力会の一員らしかった。

また駐屯地渉外広報班は「北辰館」(史料館)を管理運営している。この班員にも自らの役割に熱意を燃やした隊員がいた。旧美幌海軍航空隊基地のジオラマを殆ど自費と勤労奉仕で完成させた松崎1曹である。このジオラマは現在の隊員に歴史を教えるばかりでなく、時に訪れる元海軍軍人に限りない郷愁と誇りを呼び起こす役割を果たしているようだ。なにしろこの美幌空は大英帝国の不沈戦艦として東洋の海を睥睨していたプリンス・オブ・ウェールズ、レパルスの両艦を撃沈するという航空戦史上不滅の戦果を挙げた航空隊の一つである。海軍軍人ばかりでなく戦後の市民、陸上自衛官も誇りとしているが、その誇りを具体的映像として焼き付けるのがこのジオラマであらう。

他に

第375会計隊

隊長 平向信吾 3佐陸自95

第302基地通信中隊美幌派遣隊

隊長 久津輪浩一 3尉陸自06

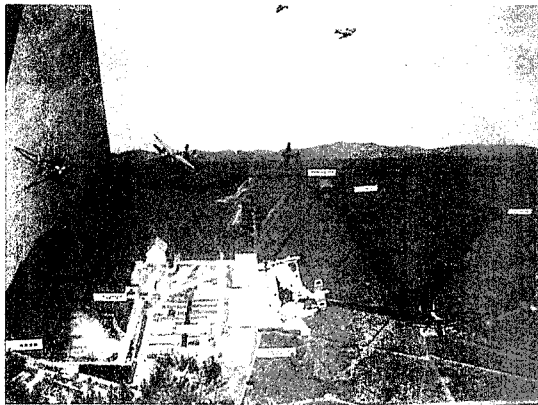
第121地区警務隊美幌派遣隊

隊長 安藤宏敏 1尉陸自01

の部隊が日夜、それぞれ地味ではあるが重要な任務を遂行している。

美しき景観

駐屯地の南東約28kmの美幌峠に案内



して頂けた。多くの美幌勤務経験者が異口同音に熱く語る美幌峠を見、それを伝えることは必要と考えたからである。美しかった。冬の北海道特有の交通量の少ない道を走り美幌峠のレストハウスに着いた。峠から屈斜路湖の対岸、更にその先の遠景が見えることは稀であるとの話であったが、僥倖にもはつきり見ることが出来た。ラジオドラマ「君の名は」の名場面であったと聞くが如何にも相応しかった。幼かった筆者には映画の記憶は臆気でしかないが、織井しげ子の歌った「ゆけよ幌馬車 唐松林 雲の流れの最果てに……」という主題歌は今も記憶している。峠の頂上近くには美空ひばりの歌碑が

あり、曲が流れていた。

終わりに

今回の取材で駐屯地司令を始め広報班長杉森2尉、班員ご一同から頂いたご好意の厚さをご報告したい。それは並大抵ではなく、多忙な現職の方々にこんな丁重にして頂いて許されるのであるうかと懸念するほどであった。司令の「細かい気配り」の結果であったかと思うが、このシリーズを開始した当時は考えられなかった勿体ないほどのご厚情を頂いたのは、我が偕行社が理解され、期待されているからと考え、有り難く頂いたが責任の重さも身にしみるのであった。

取材から週日を経て連隊長兼ねて駐屯地司令から自筆のお葉書を頂いた。「美幌駐屯地の隊員は真面目で素直で素朴な隊員が多く、部隊も癖がなくスタンダードな部隊であると思っております。これからも隊員及び部隊を鍛え道東の守りに努力する所存ですのでご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。偕行社の益々のご発展をお祈り申し上げます」。あわせて先輩方にご報告する次第である。

取材内容に啓発を頂いた編集委員大東信祐氏陸自57、取材申し込みに力を貸して頂いた事務局松田純清氏陸自63、及び前記の末永孝耶氏にお礼申し上げます。文責 松村興延陸自64

